The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヒッポリュトスの「有罪性」：彼に罪はあるか？
Author(s)	堀川, 宏
Citation	神話学研究. 2017, 1, p. 62-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66576
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヒッポリュトスの「有罪性」
――彼に罪はあるか？――

堀川　宏

1. 問題

エウリーピデース『ヒッポリュトス』（前 428 年上演）は、ヒッポリュトス（以下 Hipp.）とその義理の母パイドラー（以下 Ph.）とを主要登場人物とする悲劇作品である。この劇が持つ大きな特徴として、Ph.の人物造形のされ方の特殊性が指摘されている[1]。すなわちこの劇において Ph.は、その恋の相手である義理の息子に自ら言い寄り彼をものにしようとする悪辣な女（wicked woman）として描かれてはおらず、劇の前半では自身を苛む道ならぬ恋に徹底した抵抗を示し、女神キュプリスの前に力及ばず屈服した後もなお、自身とその家族の名誉（εὔκλεια）を守るべく行動する――それが Hipp.の死に帰結する――高潔な女性として描かれている。この点について論者の見解は概ね一致しており、議論の余地はほとんどないように思われる[2]。

しかし、もう一方の主要登場人物 Hipp.については、その人物造形をどのように捉えるべきかをめぐって見解が割れており、議論の必要がある。本稿の着眼点を簡潔にまとめると次のようになる。この劇において Hipp.は、キュプリスの崇拝を頑なに拒んだ結果、女神の怒りを買って破滅することになるが、そのような劇展開を彼の性格的な「異常さ」と結びつけて解釈する立場がある[3]。この立場に拠ると、Hipp.はこの劇で、Ph.とは対照的に、性格的に欠陥を抱えた青年として描かれており、その傲慢で狭量で未熟な性格が彼を破滅に至らしめることになる。たしかに、Hipp.によるキュプリス拒否、および Ph. ――彼の理解では乳母を介して彼を籠絡しようとしている――の恋を聞かされた際の彼女への対応は頑なであると同時に苛烈であり、そのような性格を彼が持つことは間違いない。しかしこの劇における Hipp.の提示のされ方を丁寧に観察すると、彼をもっぱらそのような「異常な」人物として捉え、彼が陥る破滅をその性格に起因する当然の帰結であると断罪することには躊躇いが残る。その躊躇いは何に由来するのか。以下で論じるのはその躊躇いを誘発する諸点である[4]。

---

[1] たとえば W. S. Barrett, *Euripides: Hippolytos*, Oxford 1964, 14-15 を参照。

[2] 数少ない例外の一つとして H. Roisman, *Nothing Is As It Seems: The Tragedy of the Implicit in Euripides' Hippolytus*, Lanham 1999 がある。

[3] E.g. Barrett, *op. cit.*, 14-15 et passim; D. J. Conacher, *Euripidean Drama: Myth, Theme and Structure*, Tronto 1967, 27-46; T. B. L. Webster, *The Tragedies of Euripides*, London 1967, 74; J. Griffin, 'Characterization in Euripides: *Hippolytus* and *Iphigeneia in Aulis*,' in C. Pelling (ed.), *Characterization and Individuality in Greek Literature*, Oxford 1990, 137-138.

[4] 同様の問題意識による議論として D. Kovacs, *The Heroic Muse*, Baltimore 1987 がある。本稿の議論はこの著作からとりわけ多くを学んでいる。

2. ヒッポリュトスの導入

まず注目するのは劇冒頭における Hipp.の提示のされ方――それは観劇者による彼の人物把握の仕方に大きく影響するだろう――である。この劇はキュプリスが Hipp.の懲罰を宣言するスピーチで始まるが、そこにおいて女神は懲罰の理由を次のように語る。

> ἀναίνεται δὲ λέκτρα κοὐ ψαύει γάμων,
> Φοίβου δ' ἀδελφὴν Ἄρτεμιν, Διὸς κόρην,
> τιμᾶι, μεγίστην δαιμόνων ἡγούμενος,
> χλωρὰν δ' ἀν' ὕλην παρθένωι ξυνὼν ἀεὶ
> κυσὶν ταχείαις θῆρας ἐξαιρεῖ χθονός,
> μείζω βροτείας προσπεσὼν ὁμιλίας. (*Hipp.* 14-19)[5]
>
> （Hipp.は）結婚の床を拒んでそれに触れず、ポイボスの妹でゼウスの娘であるアルテミスを、もっとも偉大な女神だと考え崇めている。そして緑の森で処女神といつも一緒にいて、速い犬を使って大地から獣を追い出している。人間のものを超えた交わりに身を投じて。

ここでは、Hipp.がアルテミスを「もっとも偉大な女神」（μεγίστην δαιμόνων）と見なしていると言われている（16）。引用の直前部分では、彼がキュプリスを「もっとも悪質な女神」（κακίστην δαιμόνων）と言っているとされ（13）、表現上の対応が明らかに認められる。このような考えに基づいて、Hipp.はキュプリスに関わる一切――すなわちこの女神の崇拝だけでなく性的な諸事も――を忌避している。Hipp.の破滅をその性格的な「異常さ」に結びつけて解する立場からすると、ここで示される彼の態度は、まさにそのような「異常な」性格に由来することになる。しかしこの部分における二女神に対する彼の態度の対比的な提示は、むしろ彼のキュプリス忌避を、もっともな理由を持つものとして捉えさせるように思われる。

この点についてまず確認されるべきは、キュプリスとアルテミスという相反する性質を持つ二神の対立が本劇の大枠的な構造を形成しているという点だろう。すなわちこの劇では、美と愛欲の女神キュプリスが劇の冒頭部分（1-57）に登場し Hipp.の懲罰を宣言するのに対して、その後 Ph.と Hipp.を始めとする登場人物による事態の展開を経て Hipp.の破滅が決定的になった段階で、今度は処女神アルテミスが登場し、彼の死を悲しむ言葉をかける（1282ff.）[6]。アルテミスはそこでキュプリスのことを「私たちにとってもっとも忌わしい女神」（ἡ ἐχθίστη θεῶν ἡμῖν）と言い（1301-1302）、自身と Hipp.を同じ側に置きながら、キュ

---

[5] Euripides のテクストは J. Diggle 編の OCT 版に拠る（以下同様）。
[6] この二神が形成する 'divine frame' については M. R. Halleran, *Euripides Hippolytus*, Warminster 1995, 37-39 を（その frame の不完全性については ad 1283-1466 を）参照。

プリスとの対立関係を示している。そして興味深いことに、この対立は劇が進んでゆく間中、舞台上に設えられた二神の像によって観劇者の前に常に顕在化されている[7]。観劇者は劇が進行してゆく間中この二神の対立を意識させられ続け、最終的に、その対立によって枠づけられた劇構造に出会うことになる。

この構造化された対立に照らして Hipp.のキュプリス忌避を見るとき、そこにはある種の必然性が認められる。上掲の引用では Hipp.がアルテミスと特別な関係にあることが語られていた（17, 19）が、同じことはこの後、今度は Hipp.自身の言葉でふたたび語られる（85-86 σοὶ καὶ ξύνειμι καὶ λόγοις ἀμείβομαι, / κλύων μὲν αὐδῆς, ὄμμα δ’ οὐχ ὁρῶν τὸ σόν）[8]。劇の冒頭におけるこの反復は、たしかに、Hipp.がキュプリスの言うような――この女神から見れば破滅に値する――人物であることを観劇者に印象づけるだろう。しかし、それはあくまでもキュプリスから見ればということであって、観劇者から見て彼が破滅に値するように見えることを必ずしも意味しない。

ここで注目されるのは、上掲の女神の言葉――とりわけ 17-19 に注目――が、Hipp.の主張するアルテミスとの特別な関係をキュプリスが認めていることを示してもいるという点である。この関係はまた、劇の結末近くでアルテミスによっても認められている（1333 ἄνδρα πάντων φίλτατον βροτῶν ἐμοί）。すなわち、この女神との特別な関係は Hipp.の勝手な思い込みではなく、二神によっても認められた神話的あるいは劇的な事実であり、そのようなものとして観劇者に示されている。彼は実際にこの処女神と特別な関係にある、通常の人間とは異なる扱いを受けている人物なのだ。

そのような Hipp.にとって、キュプリスに（たとえわずかでも）崇拝の態度を示すことは不可能だろう。アルテミスとの特別な関係は、彼の徹底したキュプリス忌避によって支えられているように思われるからである。

3. 「アイドースの草原」で花を摘むための条件

続いて注目するのは、Hipp.の登場場面――キュプリスのスピーチの直後にある――で彼が語る次の言葉である。

> σοὶ τόνδε πλεκτὸν στέφανον ἐξ ἀκηράτου
> λειμῶνος, ὦ δέσποινα, κοσμήσας φέρω,
> ἔνθ’ οὔτε ποιμὴν ἀξιοῖ φέρβειν βοτὰ
> οὔτ’ ἦλθέ πω σίδηρος, ἀλλ’ ἀκήρατον
> μέλισσα λειμῶν’ ἠρινὴ διέρχεται,

[7] 舞台上に二女神の像が設えられていたことについては、アルテミスについては 73-87（Hipp.が女神に花冠を運ぶ場面）から、キュプリスについては 101-102 の言葉から窺われる。
[8] 17 の παρθένωι ξυνὼν ἀεί という表現はときにアルテミスに対する Hipp.の性的な傾きを示すとされるが（cf. Roisman, *op. cit.*, 7）、ここをそのように読む必然性はない。

Αἰδὼς δὲ ποταμίαισι κηπεύει δρόσοις,
ὅσοις διδακτὸν μηδὲν ἀλλ’ ἐν τῆι φύσει
τὸ σωφρονεῖν εἴληχεν ἐς τὰ πάντ’ ἀεί,
τούτοις δρέπεσθαι, τοῖς κακοῖσι δ’ οὐ θέμις. (*Hipp.* 73-81)

あなたのために、女神よ、この花冠を人手の入らない草原からきれいに編んで持ってきました。そこでは牧人も家畜を養うことをはばかり、鋤もこれまでに入ったことがない。人手が入らないその草原を、春には蜜蜂が飛びまわり、アイドースが川の滴で大切に育てています。すべてにわたって常に思慮深くあることを、教えられたのではけっしてなく生まれながらに持つ者たちには、そこで花を摘むことが許されています。悪い者たちには許されていません。

この「人手の入らない草原」の描写は特筆すべき美しさを持ち[9]、それがしばしば処女性の暴力的な喪失の場となることから[10]、先にキュプリスによって宣言された Hipp.の破滅が現実のものになるという予感を、印象的な仕方で高めている。引用の後半では、この草原で花を摘むための条件として、「すべてにわたって常に思慮深くあること」（τὸ σωφρονεῖν … ἐς τὰ πάντ’ ἀεί）を「教えられたのではけっしてなく生まれながらに」（διδακτὸν μηδὲν ἀλλ’ ἐν τῆι φύσει）持つことが挙げられている。この条件づけに対して、その過剰な厳しさ――とりわけそこに‘moral purity’という非古典的な要素が含まれること――が前 5 世紀のアテーナイ人には奇異に映り、Hipp.の狭量さ・異常さを看取したはずだという指摘がある[11]。しかしこの指摘は、おそらく的を外している。

この問題を考えるために、先の引用と同様に、「生まれながらの美質」と「学ばれたこと」とが対比的に提示されているピンダロスの詩句を引用する。

τὸ δὲ φυᾶι κράτιστον ἅπαν· πολλοὶ δὲ διδακταῖς
ἀνθρώπων ἀρεταῖς κλέος
ὥρουσαν ἀρέσθαι·
ἄνευ δὲ θεοῦ, σεσιγαμένον
οὐ σκαιότερον χρῆμ’ ἕκαστον. (Pind. *O.* 9. 100-104)

生まれ持ったものが何にせよもっとも優れている。多くの者たちが、学び取った力で名声を掴もうとする。しかし神助に与らないものは、すべて沈黙に任せられても構わないのだ。

---

[9] この情景の比類ない美しさは、この場面について語るほとんどすべての論者によって認められている。

[10] Cf. *h. Cer.* 1-29; Sapph. fr. 2; Ibyc. fr. 286. この点についての詳細な分析は J. M. Bremer, ‘The Meadow of Love and Two Passages in Euripides’ *Hippolytus*,’ *Mnemosyne* 28 (1975), 268-280 を参照。

[11] Cf. Barrett, *op. cit.*, ad 79-81.

σοφὸς ὁ πολλὰ εἰδὼς φυᾶι·
μαθόντες δὲ λάβοι
παγγλωσσίαι κόρακες ὣς ἄκραντα γαρύετον
Διὸς πρὸς ὄρνιχα θεῖον. (Pind. *O.* 2. 86-88)[12]

賢者とは、多くのことを生まれながらに知っている者。だが学んで知った者たちは、がさつにしゃべり散らしては、二羽の鴉のようにゼウスの神々しい鳥に向かって叶いもしない言葉を唱える。

ともに「学ばれたこと」に対する「生まれながらの美質」の優越を歌う詩句であり、このような把握が古代ギリシャ人の価値判断の一部であることを示している。これらの詩句と見比べるとき、上掲の Hipp.の言葉に対して、当時の観劇者が彼の狭量さや異常さを感じたとは考えにくい。彼の言葉を素直に読むなら、彼はただ、アイドースの野で花を摘むことは通常の人間には許されておらず、きわめて優れた美質を持つ特別な人間だけの特権だと言っていると解釈されよう。そこに彼の狭量さ・異常さを認めたがる論者たちは、Hipp.がそのような人間に自身を数えている――'moral purity'という奇妙な条件をつけて――ことを問題視するが、そのように考える必然性はない。Hipp.がアルテミスと特別な関係にあることは、神々自身によっても認められている事実ではないか[13]。彼の言葉はむしろ、彼が持つ美質（σωφροσύνη）を美質として捉えさせるべく機能しているように思われる[14]。

4. 老僕とのやり取り

この場面に続いて交わされる Hipp.と老僕とのやり取り（88-120）もまた、Hipp.の人物造形を考えるうえで興味深い。そこでは彼に対して老僕が、キュプリスを敬うように説得を試みる。

{Θε.} οἶσθ' οὖν βροτοῖσιν ὃς καθέστηκεν νόμος;
{Ἱπ.} οὐκ οἶδα· τοῦ δὲ καί μ' ἀνιστορεῖς πέρι;
{Θε.} μισεῖν τὸ σεμνὸν καὶ τὸ μὴ πᾶσιν φίλον.
{Ἱπ.} ὀρθῶς γε· τίς δ' οὐ σεμνὸς ἀχθεινὸς βροτῶν;
[…]
{Θε.} ἦ κἀν θεοῖσι ταὐτὸν ἐλπίζεις τόδε;

---

[12] ピンダロスのテクストは W. H. Race 編集の Loeb 版に、翻訳は内田次信（訳）『ピンダロス　祝勝歌集／断片選』京都大学学術出版会, 2001 に拠る。
[13] Cf. Kovacs, *op. cit.*, 35. また 127 n. 23 も参照。
[14] この場面の描写を本稿と同様に Hipp.の美質を示すものとして捉える議論には、Kovacs の他に A. J. Festugière, *Personal Religion among the Greeks*, Berkeley and Los Angeles 1954, 10-18 や A. Rivier, *Essai sur le tragique d'Euripide*, Paris 1975 (2nd. ed.), 55-56 がある。

{Ἱπ.} εἴπερ γε θνητοὶ θεῶν νόμοισι χρώμεθα.

{Θε.} πῶς οὖν σὺ σεμνὴν δαίμον' οὐ προσεννέπεις;

[…]

{Θε.} σεμνή γε μέντοι κἀπίσημος ἐν βροτοῖς. (*Hipp.* 91-103)

［老］それではご存知ですか。死すべき人間たちにどんな法が定められているのかを。［ヒ］分からないな。いったい何について尋ねているのだ。［老］尊大さと偏った親しさは憎まれるということです。［ヒ］まったくだ。尊大で重苦しくない者がいるだろうか。……［老］神々の間でもこれと同じことがあるのでは。［ヒ］私たち死すべき者が神々の法に与っている以上は（そうだろう）。［老］それではどうしてあなた様は、厳かな女神に呼びかけないのですか。……［老］ですが実に厳かで、人々の間で名高い女神ですよ。

注目されるのは老僕が展開する説得のロジックである。彼はまず Hipp.の尊大さ（τὸ σεμνόν）を問題視し（93）、それを憎むのは人間も神々も同じであると論を展開して（97-99）、キュプリスを敬うべきであるとする理由としてその神威を挙げている（103, 107）。このロジックは、劇冒頭で語られたキュプリスの言葉に見られるロジックと共通している。キュプリスが問題視するのは Hipp.の尊大さであり（6, 10-13, 19, 21-22）、それを喜ばないのは神も人間も同じだとして（7-8）、自身の神威を根拠に（1-6）彼の破滅を宣言している。

このような類似を持つ老僕の説得は観劇者に、先に耳にしたばかりの女神の宣言を想起させるだろう。それによって、Hipp.が破滅するという予感はここでも高められるはずである。しかし、老僕の言葉がキュプリスを畏れる者――神々を畏れるごく普通の人間――の言葉であるということに留意する必要がある。老僕は Hipp.が頑なにキュプリスを忌避するのを見咎め、このままでは女神の怒りを買うことになると心配しているが、これは事態をキュプリスの側から見た上での判断である。それに対して Hipp.は、先に確認したように、この女神と対立関係にあるアルテミスと特別な関係にある。そして、その関係は彼の徹底したキュプリス忌避と不可分の関係にあるのだから、彼がキュプリスを受け入れることは原理的に不可能である。このような事態把握は、舞台上に設えられた二神の像と、先の場面における Hipp.の美しい提示とによって、観劇者にも充分に期待されうる。

加えて、この場面における σεμνός という語の特徴的な現れ方も注目に値する。それはまず Hipp.の「尊大さ」を意識させる形で現れ（93, 94）、続いて間をおかず、キュプリスの「厳かさ」を指して用いられている（99, 103）[15]。σεμνός という同じ語がこのように短い間に語義をずらして現れることは、観劇者に、直接には Hipp.を意識して言われる「尊大さ」を、キュプリスの「厳かさ」に重ね合わせて――Kovacs の表現では両者の境界を曖昧にする形

[15] このような現れを作者による不注意であると説明したり、あるいは 99 の σεμνός を Hipp.の「尊大さ」を意味しうるようにテクストを校訂する試みがかつてはあった（e.g. G. Murray: πῶς οὖν σὺ σεμνός [sc. εἶ], δαίμον' οὐ προσεννέπων）。しかし Barrett, *op. cit.*, ad 99 が指摘するように、それらの試みはこの個所を正しく読んでいない。

で[16]——把握させることを可能にするように思われる。このイメージの重なりは、老僕の説得のロジックがキュプリスのスピーチを想起させることと相俟って、「厳か」な女神であるキュプリスが持つある意味で「尊大」な——この表現が女神に相応しくないならギリシャの神らしく「身勝手」な——性格に目を向けさせる。じっさい、そのような「尊大」な性格を示唆する要素は女神の言葉の中にある。すなわち、キュプリスは自身を敬わないという、いかにも神らしい理由で Hipp.に腹を立て、彼を罰するという目的達成のためには、自身のために神殿および神像を建造して祈る Ph.さえも破滅させるのである（29-31, 47-50）[17]。あるいはまた、キュプリスのスピーチに一人称が横溢していること（6, 9, 10, 20, 21, 23, 28, 49 [x2], 50）も、そのような女神の性格を示唆している。

このような性格を持つ女神によって Hipp.の破滅が宣言され、その実現が彼の美しい姿の提示とともに想起させられるとき、観劇者のものとして想定すべきはどのような感情だろうか。それは卓抜な美質を持ちながら女神の力の前に滅びざるを得ない青年に対する哀れみの感情ではないかと思われる[18]。

5. ヒッポリュトスの激昂場面——パイドラーとの価値観の類似

続いて検討するのは、乳母によって継母との不義を持ちかけられた Hipp.が激昂し、館から飛び出してきて激しい女性批判を展開する場面（601-668）——先に見た老僕とのやり取りの後 Hipp.は舞台を去り、この場面でふたたび登場する——である。その批判のスピーチは女性一般を対象とする非難から始まり（616-650）、それが乳母と Ph.に振り向けられる形で展開して（651ff.）、ふたたび女性一般を対象とした非難で閉じられる（664ff.）。Hipp.は Ph.を「不正な者」（ἄδικος）と捉え（614）、彼女が企んだ奸計を実現するために乳母が派遣されたと思い込んでいる。もちろんそれは誤解であり、この劇における Ph.が彼の非難するような人物でないことを、ここまで劇の進行を追いかけてきた観劇者は知っている。加えて彼の非難を Ph.は舞台上に留まり聞いていたと想定されることから[19]、この非難は不当なものとして響き、観劇者の中に Ph.に対する哀れみが掻きたてられると想像される。

この哀れみの感情を出発点にして、Hipp.による非難の不当さと苛烈さとが彼の性格的な欠陥——Ph.の高潔な美質と対照的に捉えられるべき異常さ——を示すものとされ、この対

---

[16] Cf. Kovacs, *op. cit.*, 37.
[17] Cf. Kovacs, *op. cit.*, 33-34.
[18] キュプリスの提示のされ方についての同様の指摘は Kovacs, ‘Euripides *Hippolytus* 100 and the Meaning of the Prologue,’ *CP* 75 (1980), 130-137 (esp. 133-134) も参照。彼はそこでキュプリスの言動を倫理的に受け容れがたいものと捉えて、このような神を敬うことは「分別あること」（prudence）ではあるが「倫理的な義務」（moral duty）ではないと述べている。神の言動を倫理的な正しさ——それはきわめて人間的な価値であるように思われる——という観点から評価することが適切かどうか私には疑問だが、キュプリスの言動にある種の身勝手さを認めている点については同意できる。
[19] この想定については L. P. E. Parker, ‘Where Is Phaedra?’ *G&R* 48 (2001), 45-52 を参照。これは 600 の直後で Ph.が一旦退場したとする Kovacs の想定（Loeb 版 p. 182 の注 a と、上記注 4 の Kovacs, *op. cit.*, 54 の記述を参照）に対する説得的な反論である。

照的な提示をとおして彼の性格的な欠陥を示すことこそが、この劇における Ph.像の転換の眼目であると説明される[20]。先にも述べたように、このような把握は妥当でない。

第一に、Hipp.の激昂は、彼の性格的な欠陥を想定しないと理解できないものではない。この場面における彼の怒りはたしかに苛烈であり、その非難は Ph.の側から見て不当なものではあるが、それでも彼がここでこのように激昂するのは、彼の置かれた状況に照らしてもっともなこととして、無理なく了解可能であると思われる。651-652 の言葉から明らかなように、彼が持ちかけられたのは継母との不義への誘いである。継子と継母との間の不義は、不義のなかでも特段に恐ろしいものとして認識されうる[21]。じっさい、Ph.の苦しむ姿をそれまで目のあたりにしてきた乳母とコロス――彼女たちは Hipp.よりもずっと Ph.に近い立場（彼女を攻撃するのではなく助ける立場）にいる――にとっても、彼女の抱く恋を知ったときの衝撃はきわめて大きかった（353-361, 362-372）。この恐ろしい不義への誘いを、Hipp.は今まさに不意に――彼は乳母に対して不言の誓いを立てている――受けたばかりである。彼が置かれたそのような状況を考えると、その激昂の並々ならぬ激しさは、彼の性格的な欠陥を想定しなくても充分に了解可能なはずである[22]。

第二に、Hipp.の非難が女性一般を対象とすることもまた彼の性格的な欠陥――その行き過ぎた purity――を示すとされることがあるが、これも妥当性が疑わしい。というのは、女性に対する批判的な見方（misogyny）は周知のように、古代ギリシャの社会および文学に広く認められる特徴だからである[23]。それらの女性批判はとりわけて話者の性格的な欠陥を示すものではなく、むしろ古代ギリシャの文学に繰り返し現れる定型的な表現として受け取られるべきものだろう。したがって、いま問題となっている Hipp.の女性批判についても、必ずしもそれを彼の性格的な欠陥を示すものとして読まなければならないということはない[24]。

注目すべき第三の点は、これがもっとも重要だと私には思われるが、Hipp.の非難を支える価値観が Ph.のものと非常によく似ていることである。館から飛び出してきた Hipp.は、開口一番このように言う。

ὦ γαῖα μῆτερ ἡλίου τ’ ἀναπτυχαί,
οἵων λόγων ἄρρητον εἰσήκουσ’ ὄπα. (*Hipp.* 601-602)

---

[20] 上記注 3 に挙げた諸文献、とりわけ Barrett と Conacher のものを参照。

[21] Barrett, *op. cit.*, 12 n. 1 は両者の不義を‘especially heinous’と形容している。このことと関係して、Hipp.と Ph.の物語においては、いわゆる「ポティファルの妻」型に属する他の物語（cf. S. Thompson, *Motif-Index of Folk-Literature*, rev. ed., 6 vols., Bloomington 1955-1958, 4. 474-475）に比べて、問題となる男女の関係が（義理のという形容詞がつくにせよ）親子関係にあるという点で複雑化していることが注目される。

[22] Cf. Kovacs, *op. cit.*, 27.

[23] Cf. Hes. *Op.* 42ff. et al passim; Eur. *Andr.* 269-274, *Hec.* 1178-1182, *Med.* 573-575. なお、古代ギリシャにおける misogyny についての示唆に富む論考として N. Loraux, ‘Sur la race des femmes et quelques-unes de ses tribus,’ *Arethusa* 11 (1978), 43-87 がある。

[24] Cf. Kovacs, *op. cit.*, 27-28, 56.

ああ、母なる大地と太陽の広がりよ、口にされるべきでない何という言葉を私は聞いたことか。

ここで Hipp.は乳母の提案を「口にされるべきでない言葉」（λόγων ἄρρητον ὄπα）と捉えているが、これは先に「恋に身を任せよ」という乳母の勧めに対して Ph.が示した反応とよく似ている。彼女は乳母の提案を「あまりにも美しい言葉」（καλοὶ λίαν λόγοι）として拒み（487）、なおもその提案を推し進めようとする乳母に対して次のように言う。

ὦ δεινὰ λέξασ’, οὐχὶ συγκλήισεις στόμα
καὶ μὴ μεθήσεις αὖθις αἰσχίστους λόγους;　　(*Hipp.* 498-499)
ああ、恐ろしいことを言うのね。口を閉ざして、もう二度と恥ずかしい言葉を口にしないで。

彼女は乳母が勧める不義の提案を、口にされるべきでない恥ずかしい言葉であると捉えている。それは生まれのよい貴婦人（εὐγενής）としてこの劇に導入され、恋の成就よりも評判のよさ（εὔκλεια）を求める Ph.にとって当然の反応ではあるが、601-602 で示された Hipp.の反応との類似は明らかである。乳母の提案はその後、604 では「恐ろしいこと」（δεινά）、608 では「悪いこと」（κακόν）と言われている。

また、女性一般に対する否定的な態度の共通性も注目される。Hipp.は問題の女性批判の中で女性一般を「悪」（κακόν）と捉える（616）が、同様の認識はすでに Ph.によっても示されている。彼女は 406-407 で「自分が女という皆に憎まれる存在であることをよく知っていた」（γυνή τε … οὖσ’ ἐγίγνωσκον καλῶς, μίσημα πᾶσιν）と述べており、そこからは、女一般が世間での憎しみの対象（μίσημα）であり、ともすれば自分がそのような女であると見られかねないという自覚が窺われる。その自覚に基づいて彼女は言葉を続ける。

ὡς ὄλοιτο παγκάκως
ἥτις πρὸς ἄνδρας ἤρξατ’ αἰσχύνειν λέχη
πρώτη θυραίους.　　(*Hipp.* 407-409)
どんなひどい死に方でもすればいいのだ。よその男に対してその床を最初に辱めた女などは。

μισῶ δὲ καὶ τὰς σώφρονας μὲν ἐν λόγοις,
λάθραι δὲ τόλμας οὐ καλὰς κεκτημένας·　　(*Hipp.* 413-414)
ああ憎らしい。言葉では貞淑でいながら、隠れてよからぬ大胆な振る舞いにおよぶ女も。

彼女は 407-409 では他家の男と最初に不義を犯した女性の破滅を祈願し、続いて 413-414 では、言葉では貞淑を装いながら隠れて不貞に及ぶ女性に対する嫌悪を表明している[25]。これらの女性は、先ほど見た世間一般における女性嫌悪の原因とも言うべき女性であり、そのような女性への嫌悪を Ph.が表明していることは、女性一般を悪とする価値観が、世間一般のものであると同時に彼女のものでもあるということを示している[26]。

女性一般に対する Ph.の否定的な態度は、女性同士のお喋りを害悪と見なすという形でも表明されている。

> εἰσὶ δ’ ἡδοναὶ πολλαὶ βίου,
> μακραί τε λέσχαι καὶ σχολή, τερπνὸν κακόν,
> αἰδώς τε· δισσαὶ δ’ εἰσίν, ἡ μὲν οὐ κακή,
> ἡ δ’ ἄχθος οἴκων· (*Hipp.* 383-386)
>
> 人生の快楽はたくさんあります。長いお喋りと暇な時間、これは快くも悪いこと、それに恥ずかしいこと（sc. 不貞な恋）も。これは二重の性質のもので、害をもたらさない場合もあるけれど、ある場合には家の重荷。

彼女はここで、人生に破滅をもたらす快楽（ἡδονή）について語り、そのひとつとして「暇な状況でなされる長いお喋り」（μακραί τε λέσχαι καὶ σχολή）を挙げる[27]。ここで「暇な状況」とされるのは女部屋での生活――古代ギリシャの女性は容易に他人の目に触れないように、家の奥にある女部屋での生活を求められていた――を示唆しており、そこでなされる女同士の「長いお喋り」が、いつもそうであるとは限らないにせよ「家の重荷」（ἄχθος οἴκων）になりうると言われている。それは、この部分に対する私の解釈が正しいならば、385 で αἰδώς という語によって換喩的に示されている「不貞な恋」につながりうるお喋りに他ならない[28]。

---

[25] Barrett, *op. cit.*, ad 413-414 はここに、言葉では貞淑を装いながら不貞を実現させる女性に対する Ph.の嫉妬（envy）のトーンを看取する。それは彼女が実は Hipp.への恋を成就させたいと願っているという Ph.理解に基づいている（同様の理解をする議論として、E. R. Dodds, ‘The AIΔΩΣ of Phaedra and the Meaning of *Hippolytus*,’ *CR* 39 (1925), 102-104 や川島重成「パイドラーの恥と名誉――『ヒッポリュトス』373-430」『西洋古典学研究』26 (1978), 34-44 などがある）。しかし私の判断ではその理解は当たっていない。彼女が Hipp.に強く焦がれていることはたしかであるが、そのことは彼女がその恋を成就させたいと願っていることを必ずしも意味しないだろう。

[26] 付言しておくと、これらの言葉を含む Ph.のいわゆる「大スピーチ」（great speech）において、彼女はこのような世間一般のイメージどおりの女性から自身を区別して示すことによって、自身の行動の正しさを訴えている。つまり彼女はそこで、女性一般を悪と捉える世間の人々と共通の価値観を表明しつつ、自身は断じてそのような女性ではないと訴えている。「大スピーチ」が持つこのような構造については、『西洋古典学研究』61 (2013), 24-35 所収の拙論「エウリーピデース『ヒッポリュトス』385 の αἰδώς について」を参照。

[27] この表現は hendiadys として捉えるべきだろう。

[28] この引用部分（とりわけ 385 の αἰδώς の解釈）をめぐっては実に多様な議論がある。その議論およびそれに対する私の見解については上記注 26 に挙げた拙論を参照。

同様の認識は、激昂のただ中にある Hipp.によっても示されている。

χρῆν δ’ ἐς γυναῖκα πρόσπολον μὲν οὐ περᾶν,
ἄφθογγα δ’ αὐταῖς συγκατοικίζειν δάκη
θηρῶν, ἵν’ εἶχον μήτε προσφωνεῖν τινα
μήτ’ ἐξ ἐκείνων φθέγμα δέξασθαι πάλιν.
νῦν δ’ †αἱ μὲν ἔνδον δρῶσιν αἱ κακαὶ† κακὰ
βουλεύματ’, ἔξω δ’ ἐκφέρουσι πρόσπολοι. (*Hipp.* 645-650)

女に対して召使いの出入りを許すべきではなかったのだ。（そうではなくて）その女たちには言葉を持たずに噛みつくだけの獣を一緒に住まわせて、（女主人が）誰かに声をかけることも、反対にその獣たちから声をかけられることもないようにするべきだったのだ。それが実際には悪い計画を……そして召使いが外へと持ち出してくる。[29]

ここで Hipp.は、女性に召使いをつけるのではなく、代わりに言葉を持たない野獣を一緒に住まわせて、「悪い計画」（κακὰ βουλεύματα）が女たちの間で企まれないようにするべきだったと言う。ところが実際にはその計画を女たちが「内で」（ἔνδον）企み、召使いがそれを「外へ」（ἔξω）持ち出してくる。この「内」と「外」との区別が女部屋で営まれる女性たちの日常生活を前提にしていることは明らかであり、その「悪い計画」が、乳母によって彼に持ちかけられたのと同様の、不貞な恋にまつわる計画を指していることもまた明らかだろう。

それに加えて、不貞な恋に身を任せる女性に対して、彼女がその夫と対面するという状況を想定した上での物言いも、Hipp.と Ph.に共通している。まずは Ph.の言葉から確認しよう。

αἳ πῶς ποτ’, ὦ δέσποινα ποντία Κύπρι,
βλέπουσιν ἐς πρόσωπα τῶν ξυνευνετῶν
οὐδὲ σκότον φρίσσουσι τὸν ξυνεργάτην
τέραμνά τ’ οἴκων μή ποτε φθογγὴν ἀφῆι; (*Hipp.* 415-418)

ああ、海の支配者であるキュプリスよ、その女たちはいったいどのようにして、夫たちの顔を見るのでしょうか。共犯者である闇と家の梁とがいつか叫び声を上げはしないかと、恐れないのでしょうか。

[29] 649 のダガー部分は訳出していないが、おおよそ「悪い女たちが中で企んで」というような意味になると想像される。ここをそのような意味で解するためには、まず δρῶσιν という語が都合が悪いのだが、そのことについては Barrett, *op. cit.*, ad 649-650 および Halleran, *op. cit.*, ad 649-650 を参照。少なくとも意味がとれる修正案として、αἱ μὲν ἔνδον δρῶσιν を ἔνδον ἐννοοῦσιν と読むというもの（Heiland）などがある。

ここで「その女たち」（αἱ）というのは、言葉では貞節なことを言いながら陰で不義に耽る女性――Ph.にとっては憎むべき女性――を指している。この種の女性を非難するに際してPh.は、その女が夫と対面する状況を想定して、不義を犯している以上は夫の顔など見られるはずがないと述べる（416）。そしてそれに関連して、不義を目撃していながら今は「共犯者」（ξυνεργάτης）として黙ってくれている「暗闇と家の梁」（σκότος τέραμνά τ' οἴκων）がいつか声を上げて、彼女の不義を暴露するのではないかという恐怖が表明される（417-418）。

同様の状況想定は、Hipp.によって次のような形で繰り返される。

> νῦν δ' ἐκ δόμων μέν, ἔστ' ἂν ἐκδημῆι χθονὸς
> Θησεύς, ἄπειμι, σῖγα δ' ἕξομεν στόμα·
> θεάσομαι δὲ σὺν πατρὸς μολὼν ποδὶ
> πῶς νιν προσόψηι, καὶ σὺ καὶ δέσποινα σή. (*Hipp.* 659-662)
>
> だが今はテーセウスが異国の地にいるから、私も家から出て行って、口を閉ざしておこう。しかし父上（sc. テーセウス）が戻ると同時にやって来て、おまえがどのように彼と顔を合わせるのかを見てやるつもりだ。おまえとそして、おまえのご主人様とがだ。

Hipp.はここで Ph.を、乳母によって彼にもたらされた不義の計画を主導した張本人であると捉えている。もちろんそれは誤解だが、ともかく彼はそのような認識に基づいて、今は不在のテーセウスが戻ってきたら、Ph.がどのようにして夫の顔を見るのかを眺めてやると言う[30]。これは Ph.が恐れていたことそのものであり、それによって彼女は、まさに自身が嫌悪しているタイプの女性――彼女はそのような女性から自身を区別することによって自身の行動の正しさを訴えていた――と同様に見なされ、皆から非難されることになるだろう。そうなれば彼女の評判は地に落ち、夫ばかりか子供たちの立場も危うくなるにちがいない[31]。

このように、問題の場面における Hipp.の激昂と非難は、Ph.と同様の価値観によって支えられており、そのことが類似の言葉遣いや状況想定によって表現されている。そうである

---

[30] 662 の述語動詞（προσόψηι）は二人称単数形であり、直接には乳母をその主語とする。しかしそれに付された καὶ σὺ καὶ δέσποινα σή という表現は、Hipp.の関心の中心が乳母ではなく、Ph.の方にあることをはっきりと示している。この付け加えによって、Ph.に対する Hipp.の非難はあざけりの調子を伴うことになる（cf. Barrett, *op. cit.*, ad 661-662）。

[31] Cf. 419-425. この箇所に関連して、656-660 で Hipp.が沈黙の誓いを守ると言っているのに、なぜPh.はそれを信じないのかということが問題とされることがある。この問題については、B. M. W. Knox, 'The *Hippolytus* of Euripides,' *YCS* 13 (1952), 3-31 にある次の説明がすべてを尽くしているように思われる。'[...] Phaedra's situation is desperate. She does not believe that the disgust and hatred revealed in Hippolytus' speech will remain under control — "He will speak against us to his father," she says [...] (690) — and even if she could be certain of Hippolytus' silence, she is not the woman to face Theseus with dissimulation. She wondered, in her long speech to the chorus, how the adulteress could look her husband in the face (415-416), and even if she had the necessary hardness, the situation would be made difficult, to say the least, by Hippolytus' announced intention to watch her at it (661-662).' (p. 13).

以上、Ph.の方だけを高潔で賞賛されるべき人物と捉え、Hipp.の方は性格的に欠陥を抱えた「異常な」人物と捉えることは不当だろう。両者の性格はけっして対立的ではない。

6. テーセウスとの対決場面——不当な非難と性格への着目要請

Hipp.の非難を受けたPh.は、自身の評判（εὔκλεια）の喪失を回避すべく、事態を好転させる「新しい言葉」（καινοὶ λόγοι）（688）を求めて、それを見出す（716-718）。それはHipp.が自分を無理やり犯そうとしたとする讒言だった。彼女はその讒言を書き置いて自死し（724-731）、帰還したテーセウスがそれを発見して（856-865）、激昂のあまりHipp.への呪いを祈願するに至る（882-890）[32]。そこにHipp.がふたたび登場し、讒言を信じるテーセウスに対して報われない弁明を展開する。

以前の場面で退場した後、舞台上で何が起こったのかをHipp.は知らない（905-910）。説明を求める彼に対して、Ph.の讒言を信じるテーセウスは、息子の自称する分別と汚れのなさに疑いの目を向け（948-951）、彼の行動を非難するスピーチを展開する（916-980）。その誤解に基づく非難に対して、Hipp.は報われない弁明——彼は乳母との間で結んだ誓い（cf. 610-612, 657-658）に縛られて真実を話すことができない——を繰り広げ（983-1035）、その弁明に聞く耳を持たない父親によって、その身の破滅につながる追放へ追いやられることになる（1038-1101）。

このような展開の中で、Hipp.に対するテーセウスの非難は、讒言を信じることに端を発する誤解に満ちている。たとえば、自分が何らかの理由で父親の不興を買っているらしいことを察したHipp.（932-935）に対して、テーセウスは次のように言う。

> σκέψασθε δ’ ἐς τόνδ’, ὅστις ἐξ ἐμοῦ γεγὼς
> ἤισχυνε τἀμὰ λέκτρα κἀξελέγχεται
> πρὸς τῆς θανούσης ἐμφανῶς κάκιστος ὤν.
> […]
> σὺ δὴ θεοῖσιν ὡς περισσὸς ὢν ἀνὴρ
> ξύνει; σὺ σώφρων καὶ κακῶν ἀκήρατος;
> οὐκ ἂν πιθοίμην τοῖσι σοῖς κόμποις ἐγὼ
> θεοῖσι προσθεὶς ἀμαθίαν φρονεῖν κακῶς. (*Hipp.* 943-951)
>
> この男を見よ。私から生まれた子でありながら、私の臥所を辱めようとし、死んだ女によってはっきりと極悪人であることを明かされている。……おまえが人並み外れた男で、神々と一緒にいるだと。おまえが思慮深く、悪事に染まっていないだと。おま

[32] この呪い（888, 890 ἀράς; cf. 44 ἀραῖσιν）がキュプリスによって予告され現実のものになるまでのサスペンスを伴う劇展開については、それをいわゆる‘this day motif’との関係で論じた『西洋古典論集』23 (2015), 14-38 所収の拙論「エウリーピデース『ヒッポリュトス』における「この日」への言及と劇展開」を参照。

えの自惚れを信じて、無知を神々のせいにして考えを誤るなど、私にはけっしてできないぞ。

これが誤解であることを観劇者は知っている。この非難は、Ph.の讒言を受けてテーセウスが頭の中で作り上げた想像上の Hipp.のイメージによるものであり、そのイメージはこれまで舞台上で示されてきた Hipp.の姿とは異質である。

実際とはまったく異なる、誤解に基づくテーセウスの非難はさらに続く。彼は 952-954 では Hipp.をオルペウス教徒と見なして非難し、955-961 では彼を「恥ずべきこと」（αἰσχρά）を企みながら「厳かな言葉」（σεμνοὶ λόγοι）で獲物を狩る者の一人に数えて「極悪人」（κάκιστος）と呼び[33]、966-970 では Hipp.が性的な放埒さ（τὸ μῶρον）に捕らわれた者として非難される。彼の非難が Ph.の書き置きに基づくことは、注目すべきことに、944-945（κἀξελέγχεται / πρὸς τῆς θανούσης ἐμφανῶς κάκιστος ὤν）、958-961（τέθνηκεν ἥδε· τοῦτό σ’ ἐκσώσειν δοκεῖς; / ἐν τῶιδ’ ἁλίσκηι πλεῖστον, ὦ κάκιστε σύ· / ποῖοι γὰρ ὅρκοι κρείσσονες, τίνες λόγοι / τῆσδ’ ἂν γένοιντ’ ἄν, ὥστε σ’ αἰτίαν φυγεῖς;）、971-972（τί ταῦτα σοῖς ἁμιλλῶμαι λόγοις / νεκροῦ παρόντος μάρτυρος σαφεστάτου;）で繰り返し確認されている。Ph.の書き置きの内容は偽りの告発であるから、この執拗な確認は、自身の展開する Hipp.非難が信頼すべき証拠に基づくものであるということを言おうとするテーセウスの意図に反して、むしろそれが不当なものであるという印象を強めるはずである。

このような不当な非難に対して Hipp.が試みる反論は、これまで舞台上で示されてきた自身の姿に訴える形で進められる。彼はまず 991-1006 で、先にテーセウスが非難した自身の行動――テーセウスは彼の敬虔さを見せかけのものと捉え、彼を性的な放埒さに捉えられた「極悪人」であると非難した――に対して、自身の誇る比類ない思慮分別（σωφροσύνη）を引き合いに出して反論する（994-995）。その思慮分別はすぐ後で、神々に対する敬虔な態度（996）、正しい者たちだけとの交友関係（997-999）、そしてそのような友人たちに対する常なる尊重（1000-1001）として具体的に説明される。これらのうち神々に対する敬虔な態度は、アルテミスに対する徹底した献身と、その結果としての女神との特別な関係という形で、この劇の冒頭近くで示されていた（14-19, 83-87）[34]。そして思慮分別は彼が自負するもっとも重要な性質であり、ここで正しい者たちとの交友関係について述べる彼の言葉に見られる「慎み」（αἰδώς）という語とともに、あの人手の入らない草原（ἀκήρατος λειμῶν）の描写において、彼の敬虔な姿が美しく提示される際に見られた言葉である（78-81）。観劇者によって認められてきたこれらの美質を根拠にして、彼は父親の不当な非難に反論して

[33] 狩りのイメージがここでは、Hipp.の体現する純潔と正反対のものと結びつけられていることが注目される。なお、狩りと純潔との結びつきについては W. Burkert, *Structure and History in Greek Mythology and Ritual*, Berkeley, Los Angels and London 1979, 11ff.と ibid., *Homo Necans*, Berlin 1972, 95 を参照。

[34] Hipp.はキュプリスに対して敬虔な態度をとらないが、そのことは彼の敬虔さを否定するものではない。アルテミスに対する彼の敬虔さは、すでに確認したように、この女神と対立するキュプリスを忌避することによって支えられている。

いる[35]。

その後、自分が Ph.を我がものにしようとしたという、テーセウスによる非難の根本をなす事柄についての蓋然性の観点からの反論（1008-1020）に続いて、Hipp.は自身の側からの反論としてまだ言われていない最後の一つとして（1021）、自分の潔白について誓いを立てる（1025-1031）[36]。ここで注目されるのは、この誓いが実質的には自身の潔白についての訴えになっているということ、そしてその誓いを立てる際に彼が訴えているのが、先ほど見た 991-1006 におけるのと同じく、自身の持つ性格であるということである。すなわち、彼は上述の誓いに至るまでの短い前ふりの部分において自身の性格を焦点として（1022 οἷός εἰμ' ἐγώ）、もし仮に自分に証人がいて、そして Ph.が生きていたとしたら、テーセウスは誰が悪人かを知っただろうにと述べている。そして問題の誓いに至っても、潔白の訴えの拠所として自身の性格を引き合いに出している（1031 εἰ κακὸς πέφυκ' ἀνήρ）。この誓いはコロス――彼女たちも Ph.と交わした誓い（710-714）に縛られ真実を話すことができない――によって、「充分に強い反論」（ἀρκοῦσα ἀποστροφή）であり「小さくない信頼性」（πίστις οὐ σμικρός）を持つものとして受け容れられている（1036-1037）。テーセウスの非難が誤解に基づいた不当なものであること、Hipp.による反論が以前の場面で示された彼の美質――Hipp.の登場場面はそれを認めさせるべく構成されていた――を引き合いに出しながら進められていること、そしてその美質が彼の誓いの基礎をなしていることを勘案すると、彼の誓いに対するコロスの好意的な反応は、この場面に対する観劇者の意識を Hipp.に対して同情的な方向へと導くものであるように思われる[37]。

その方向づけがなされた状況で、テーセウスはなおも Hipp.を非難しながら彼の追放を宣言し、それを受けて Hipp.は弁明の甲斐なく破滅に向かうその身を嘆く。そのような状況で発せられる Hipp.の次の言葉は、どのような響きを持つだろうか。

> ὦ δώματ', εἴθε φθέγμα γηρύσαισθέ μοι
> καὶ μαρτυρήσαιτ' εἰ κακὸς πέφυκ' ἀνήρ. (*Hipp.* 1074-1075)
> ああ館よ、おまえが私のために声を発して、私が悪い男として生まれついているのかどうかを明かしてくれたら。

---

[35] この場面における Hipp.の言葉を尊大な self-praise と捉えて非難する議論（Barrett や Conacher）に対しては、Hipp.の置かれた状況を確認することで反論したい。乳母との誓いに縛られた Hipp.には、始めから彼を有罪と決めてかかるテーセウスに対して、他にどのような弁明が可能だというのだろうか。この点については Kovacs, *op. cit.*, 64 も参照。

[36] 1021 におけるまだ言われていない「一つのこと（ἕν）」の内容が 1025 以下の誓いであることについては、Barrett, *op. cit.*, ad 1021 を参照。

[37] 一方で、この場面におけるテーセウスの誤解もまた、彼の置かれた状況に照らして仕方のないものであると納得することが可能である。この点については 1325-1326, 1334-1337 のアルテミスの言葉も参照。この劇は、最終的に出来する悲劇的状況に対して、それが「誰々が（特別に）悪いから起きた」と感じさせる仕方では作られていない。

φεῦ· εἴθ’ ἦν ἐμαυτὸν προσβλέπειν ἐναντίον
στάνθ’, ὡς ἐδάκρυσ’ οἷα πάσχομεν κακά. (*Hipp.* 1078-1079)
ああ、私が自分に面と向かって立ち、私自身を見つめることができたなら。私がどんな酷いことを身に受けているかに対して泣くことができただろうに。

一つ目の引用では、先ほどと同じく自身の生まれ持った性格に焦点を定める言い方（εἰ κακὸς πέφυκ’ ἀνήρ）とともに、「館が声を発する」という発想が目を引く。これは 417-418 における Ph.の言葉――彼女はそこで、不義を犯して夫と対面する女性に対して、暗闇と家の梁とが声を上げることを恐れないのかと疑問を投げかけている――を想起させる。これは Hipp.の潔白を示しながら、Ph.との性格的な類似を意識させうる表現だろう。彼は決して父親が非難しているような人物ではない。二つ目の引用における願望文の内容は現実には不可能なことであり、またいささか奇妙な状況想定にも感じられる。しかしこれが劇場において発せられる言葉であることを勘案すると、それはこの場面において、ある明確な働きをしているように思われる。すなわち観劇者――彼らは Hipp.に面と向かって立ち、彼を見つめることが可能である――に対して、彼の陥った状況を哀れみ涙を流すことを求めるという働きである。その求めに応じる準備が、ここまで劇の進行を追ってきた観劇者には充分に整えられているはずだ。

Hipp.のこの言葉はテーセウスによって嘲りの言葉で迎えられ（1080）、彼による追放の促しを受けて（1084-1085）、Hipp.は舞台を去ることになる（1090-1101）。退場間際の Hipp.の言葉（1100-1101 ὡς οὔποτ’ ἄλλον ἄνδρα σωφρονέστερον / ὄψεσθε, κεἰ μὴ ταῦτ’ ἐμῶι δοκεῖ πατρί）はおそらく、この言葉の直接の対象であるトロイゼーンの若者たち（1098）だけでなく、この劇を観ているすべての者に向けられている。それをテーセウスがしたような形で、Hipp.の性格的な美質に対する疑いを持ちつつ聞くことは、私には難しいように思われる。

7. 結論

以上、この劇における Hipp.の有罪性を認める立場に対する反論として、そのような把握を躊躇わせる諸要素を確認してきた。この劇において Hipp.はキュプリスに関わる一切を忌避し、Ph.に対する非難も苛烈を極める。たしかにそれは、彼の言動に有罪性を認めようとする論者たちが強調するように、Ph.に対する哀れみを掻きたてるだろう。しかしながら、この劇における Hipp.の人物造形はけっして Ph.と対立的な形でなされてはいない。両者の言動を支える価値基準はむしろ類似しているのだ。そして、本劇における Hipp.の姿は一貫して、Ph.の場合と同様に、その性格的な美質を看取させうるように提示されている。テーセウスとの対決場面に至っても、それは変わらない。以上のことを本稿は確認してきた。

Hipp.はけっして、その性格に異常な欠陥を抱えていたから破滅したのではない。キュプリスを徹底的に忌避する彼の性格はこの劇に組み込まれた構造的なものであり、仮にこの

女神をたとえ一部分でも受け入れてしまえば、それはもはや Hipp.とは言えないだろう。では、彼の破滅はどのようなものとして説明されるべきだろうか[38]。このような問に明確な答えを与えることは難しい。それは、一つには Hipp.をめぐる伝説が彼を破滅させるように出来ているから（このことはたとえば 1423-1430 から窺われる）であり、また一つには、この劇がこのような形で――キュプリスとアルテミスとの対立を大枠として――構成されているからでもある。そのことを踏まえてあえて言えば、この劇において Hipp.は、二神の対立を枠組みとしてキュプリスの強大な力を動因とする、劇の構造そのものによって破滅するということになるかもしれない。そのとき彼の破滅に、有罪性という不適切に倫理的な原因を求める必要はないはずである。

（京都大学）

[38] このように問うのは、Hipp.の破滅の原因をその性格的な欠陥に求める議論が、このような問題意識を出発点にしているように思われるからである。それらの議論はこの劇における Hipp.の美しさを認めながら、その美しさの奥にあえて彼の欠陥を見ようとしているように見える。